

日本人にとっての式典と共同体感覚

The ceremony and Community feeling for Japanese

JEPC イベント総研研究員

藪花 健一

Jepec Event general laboratory Advanced Researcher Kenichi Yabuhana

はじめに

先日行われたバンクーバー冬季オリンピックにおいてスノーボード男子ハーフパイプの国母和宏選手の選手村の入村式に臨む服装の乱れや態度の悪さが大きく取り沙汰されて問題になってしまったのは、まだ記憶に新しいところである。あわや出場辞退という大騒動にまでなってしまったが、これは日本人の共有している常識的な“入村式に向かう選手の姿”とテレビに映し出された国母選手の“服装”、“マナー”“態度”があまりに離れていたためであると考えられる。「これではオリンピックという晴れ舞台の神聖なる入村式にこれから臨む日本人の姿としては、あまりにみっともないだろう」と多くのテレビを観ていた日本人が憤慨してしまったのである。表(1)は、この問題に対して3つの選択肢から選んだアンケートの結果である。

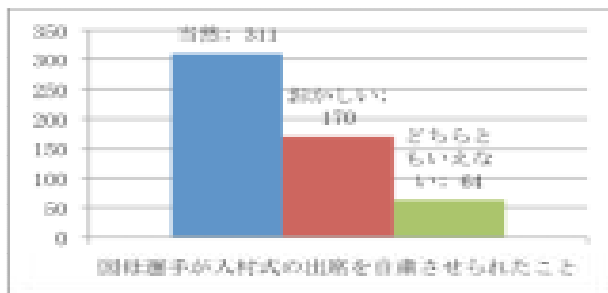


図 1(10 年 2 月 12 日午後 7 時現在、J-CAST ニュース <http://www.j-cast.com/>)

6 割の日本人が入村式の出席を取りやめさせたことを当然と見ているのである。

ちなみにどんな乱れだったかというと、ズボンの腰骨よりも低く下げた履き方とシャツの裾を出していたこと、それにサングラスに鼻ピアス、緩めたネクタイである。これでは、自粛は当然とも考えたくもなるのであるが、その後、他のいろいろな開会式を報じた記事を読んでいくとオリンピック開会式で地元カナダのロック歌手のブライアン・アダムスがネクタイをだらしなく緩めた格好でステージで歌を披露していたとい

う記事が載っていた。この記事を観て、何か引っかかるものを感じた人は多かったのではないだろうか。実際インターネットの投稿などを読んでみるとこのことに関して異議を唱えている投稿も目に付いた。国母選手の着こなしはストリート系ファッションであり、プロのスノーボーダーとしては普通の着こなしであったというのである。

なぜロック歌手のブライアン・アダムスはロック歌手として普通にだらしなくネクタイを締めてステージに上がり熱烈な歓迎を受けていたのに、スノーボーダーの国母選手もスノーボーダーとして普通の格好をしていただけなのに開会式の出席を自粛しなければいけなかったのかという意見である。

しかもアダムスは余興とはいえ開会式という式典の中であったのに対し、国母選手の場合は、まだ式典に向かう成田からバンクーバーまでの飛行機での移動中の時点での話なのである。この一見矛盾した事実を考えていくと、そこに我々日本人の式典に参加するという感覚が欧米の人たちの感覚とは違うという事実がはっきりと分かってくる。この感覚の違いは、いったいどこからくるのだろうか。

研究の背景

インターネットのサイト Tech On の中に「藤堂安人の材料で勝つ」というコラムがあるが、2007 年 8 月 20 日「“拡大する共同体”と“拡大しない共同体”という題で『中国の不思議な資本主義』(東一眞著,中公新書クラレ)⁽¹⁾から引用された、国母選手の問題を考えるうえで大変興味深い文章が載っていたのでここで紹介したい。

『日本社会では「世間」という名の拡大された共同体が「日本全土を大気のように覆っている点に特徴がある」(同書 p.45)と見る。そうした「拡大共同体」の中に、会社や家族といったより小さい共同体が入れ子構造になっている。そして日本ではこうした拡大共

同体としての「世間」が、人々が行動する規範となっている。「世間」が認めることが正しいことであり、そこから「赤信号、皆で渡れば怖くない」というメンタリティも生まれる。』というのである。このコラムから考えてみると、つまり国母選手の場合は、この日本における世間という「拡大共同体」の規範から外れてしまった服装、マナー、態度をとってしまったことが問題だったと考えられるのではないだろうか。

「共同体感覚」という言葉が心理学の中に出てくるが、『共同体感覚とはアドラー心理学でもっとも大事なキー概念の一つ』⁽²⁾である。“社会的関心”という言葉で言い換えることができるこの「共同体感覚」⁽³⁾であるが拡大共同体の規範を守ろうとする意識こそがそれに当てはまると言っているのではないだろうか。

また別のサイトを次に開いていくと、佐々木正明氏(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団正教師)という方が「ペンテコステ宣教学」というサイト⁽⁴⁾の中に「日本文化の特徴」という題で次の文章を載せている。

『日本人の生活は、個人の生活ではなく、共同体の一員としての生活です。(中略)日本の共同体意識は非常に強力です。(中略)日本人独特の共同体感覚は、荒海に囲まれた島国で、外国人との接触が非常に少なかったということに原因の大部分があります。島国というだけならば他にも例がありますが、日本ほど隔離された状態で、長い間小さな国土の中で定住生活を営み、均一の生活環境と感覚を育ててきた国はありません。(中略)しかも日本という国土は、適当に小さくて、世界の多様性に比べると、ほとんど共通ともいえる温和な自然条件に恵まれ、共通の生活環境を提供し、人々の交流も相当に行われていたため、共通の感覚、共通の情緒、共通の生活習慣が生み出されたのは当然の結果でした。これが外国の侵略に邪魔されず、2千年以上も途絶えることなく面々と育まれてきたのです。それは深く日本人の中に染み込み、ちょっとやそつとで拭い去ることのできないものになったのは当然のことです。

このような共同体文化で最も大切にされたものは、共同体内部の人間相互の「和」です。「和を以て尊しと為す」といわれるとおりです。長い間培われた、そのような共通の感覚、情緒、習慣、生活様式が、「和」、即ち調和、平和、そして「なごみ」を作り出すものとして大切にされ、そのような共通の理解をもった国が「大和」の国なのです。(中略)したがって、このよう

な居心地の良い文化の中で最も悪いことは、和を乱すこと、和を破壊することです。個人の特色が強すぎるもの、刷新的なもの、改革的なものは疎まれ、「出る釘は打たれる」ということになり、和になじむこと、長いものには巻かれ、臭いものには蓋をすることが、最も美德とされるのです。日本人は小さい時から、「他人(人)が見ているわよ」、「恥ずかしくないの」と育てられ、「どんなことをしても良いが、人様の迷惑になることだけはするな」と、訓戒されて成長するのです。』とある。日本人が何よりも長い間「和を尊ぶ」生き方を大切にしてきたがために、今回カナダのアダムス選手の服装がカナダの国内では全く問題にならなかったのに対し、国母選手の服装の方は日本国内においては看過されずに大騒動に発展してしまったのである。

・ 研究の目的

近年、この日本人の「共同体感覚」には変化がないのだろうか。

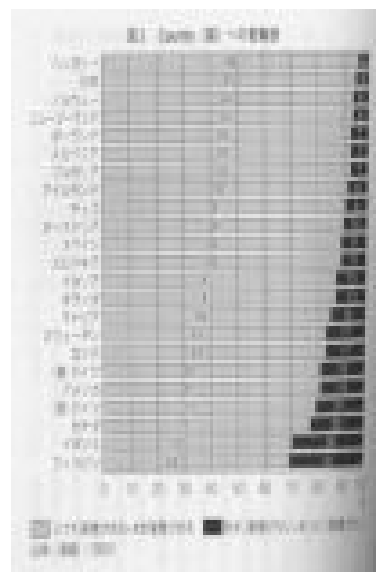


図 2「愛国心 のゆくえ」(広田照幸著 / 世織書房)

これは、インターネットのウェブサイト⁽⁵⁾に載っていた「愛国心 のゆくえ」(広田照幸著 / 世織書房)に掲載された各国の国に対する愛着感を調査したものであるが、このグラフからも解るように、日本人は“国への愛着感”ということでは、アメリカ人やカナダ人を上回り、ハンガリーの人について2番目という調査結果が出ているのだ。

現代でも多くの人が日本人であることに愛着を感じており、「共同体感覚」というものは、日本が国際的になった現代でもまだまだ日本人に強く残っているのである。

しかし近年、若い世代の日本人の「共同体感覚」に

「国母事件」以外にも少しずつ綻びを感じるような出来事が式典で起きている。例を挙げると卒業式における国歌斉唱、国旗掲揚を一部の教師や生徒が拒否する事件⁽⁶⁾や成人式での新成人が酔っ払ってトラブルを起こす事件がある。

今まで、「和を尊ぶ」ことを美学としてきた日本人だが、これはいったいどうしたことであろう。もちろんこれは、学校や地域といった共同体の一員として扱われることを拒むことから起きるのではない。もし、学校や地域といった共同体の一員として扱われることが不満であるのであれば、出席自体をしないのではないだろうか。そこには、現代の若者の画一的なものや形式的なものを拒み、個性的で独創的なものへの要求がある。

今まで日本人が“和を乱す”と避けてきた個人の特色が強すぎるもの、刷新的なもの、改革的なものを現代の若者が望みながら、実際に執り行われるのは画一的で形式的な式典であるというギャップのフラストレーションの爆発から起こるのではないだろうか。

このあたりに今までの共同体感覚とは質の面で近年大きく変わりつつあることが見受けられる。実際に2002年01月14日の産経新聞と東京朝刊によると埼玉県深谷市では、成人式を「式典の部」と「歓談の部」に分ける試みを始めており、同県飯能市や三重県名張市でも、式典とは別に「おしゃべりタイム」が設けられ始めたという⁽⁸⁾。また卒業式においても2000年以降、私立高等学校、大学を中心に学校側から卒業生へのプレゼントとして有名ミュージシャンを招いてサブライズライブを行うというイベントが各地で起こり、「一生思い出に残る」と生徒達から好評を得ている⁽⁹⁾という。

このように実際、様変わりしつつある式典が増えてきているのだ。他にも映像や音響を使ったり、日時や会場を変えたりといろいろな改革の試みが行われている。

『儀式(ぎしき)とは、特定の信仰、信条、宗教によって人間が行う、一定の形式、ルールに基づいて行う、日常生活での行為とは異なる特別な行為。宗教的色彩の薄いものは式典とも称され、セレモニー(ceremony)ともいう。』⁽¹⁰⁾とあり、多くの出席者がいる場合、肅々と式典を進めていくには、出席者各自の「共同体感覚」というものが重要なものとなってくるのである。

ここでぜひ、今まで自分が携わってきた式典におい

てここでいう共同体感覚が欠如していたと思える事例について、それは共同体感覚のいかなる部分が欠如していたものなのかをこれを機に考えてみたい。

なお、ここで取り上げる式典は表1に分類されているものとし、婚礼や葬儀は除外する。

表1 式典の種類

式典種類	内容	例
記念式典	あとの思い出として残しておいたり、過去の出来事への思いを新たにす式典	入学式、卒業式、開通式、表彰式典、除幕式、調印式など
周年式典	節目となる周年の記念を、その歴史を振り返り今後の展望を発表したりする式典	成人式、周年記念式典など
建築式典	建築物の着工時から完成時まで、節目となる時に行う式典	地鎮祭、起工式、上棟式、定礎式、竣工式など

・研究の方法

アルフレッド・アドラー⁽¹¹⁾は「性格の心理学」という著書の中で『われわれは人を判断する時、共同体感覚という理念を基準とし、その人の態度全体、思考、行為をそれに照らしてはかるといふ以外の仕方ではできない。(中略)われわれが共同体の中にあり、強制の論理に従わなければならないという事実から、人を判断するためには確実な基準を持たなければならないということになり、そのためには、共同体感覚の大きさ以外の基準を認めることができないのである。』⁽¹²⁾と述べている。少し飛躍して考えさせてもらうなら、式典とは、前述した通りに“一定の形式、ルールに基づいて行う”ある種の強制の論理に基づいて行うものであり、これを成功させるためには、共同体感覚という確実な基準を持つことがとても重要になると解釈してもいいのではないかと。共同体感覚の欠如が式典においてはマイナスに働くのである。ここで共同体感覚の欠如が式典においてどういう悪影響を及ぼすかという観点から考えてみたい。考えるにあたっては、「性格の心理学」に共同体感覚が欠如している性格特性が並べられているので、それを順に追ってそれぞれ考えてみたい。そして式典を成功に導いていくのに必要な人間の要素とは何か考えてみたい。

・研究の結果

1. 攻撃的な性格特性

(1) 虚栄心(野心)

まず、共同体感覚の欠如がもたらす攻撃的な性格特性としてアドラーは虚栄心(野心)を挙げているが⁽¹³⁾、

この虚栄心というものが、式典という多くの人々が目的を持って集まる場所では端的に表れることがよくある。竣工式などで紅白幕やジョーゼットなどで必要以上に派手に装飾された会場に案内された時や、パーティー会場に用意された、とても出席者だけでは食べ切れないだろうと思わせる量や“どんなVIPが来るのだろう？”と思ってしまうほどの贅沢な料理や飲み物を目にした時、そして会場がパンクしてしまうと思うほど出席者で混雑している時などにもそこに主催者の虚栄心を感じざるを得ない。これは、周りの人に認められたいという努力が高じてしまい、『実際にあることよりも思われに関わるような、様々な役に立たない仕事や消費へと人を強いるということ』⁽¹⁴⁾になるのである。そこには、出席者の人がこれをどう感じるかなどという視点は忘れ去られてしまっており、ただ自分（達）を満足させるために努力しているのである。そしてまた出席者の態度や服装に視点を当てても虚栄心というものを見取ることができ、式典において他の出席者のことやタイムスケジュールを気遣わないような長い挨拶をする来賓、主役は主催者であり自分は目立たないように振る舞わなければならないのに派手な衣装で注目を引こうとする出席者も共同体感覚の欠如がそうさせるのであろう。また酒や料理をあまり口にしないことや会場の隅に一人で慎ましく立っていることも一見は虚栄心とは違うように見えるが、これも『虚栄心のある人は、賢明であれば、共同体とぶつかり矛盾していることにすぐ気づくので、隠す努力をする。』⁽¹⁵⁾と書いている。また式典を欠席したり大幅に遅刻する行為に関して、『高慢にも自分を特別に見せる。この特別であることを、時に誇らしげに自分について出張するのである。』⁽¹⁶⁾ための行為でありこれも虚栄心からきていると指摘しているのだ。

会場に張られた幕のしわや会場に準備した椅子や机などの備品のほんの微妙な汚れや破損など本当に仔細なことをくどくど指摘する出席者も稀にいる。これが主催者側の人間に指摘されるならまだ分かるのだが、こういう人間の心理もアドラーは、『他者を没落させることで、優越感を創り出す試みである』⁽¹⁷⁾と書いている。そして『虚栄心は、共同体感覚と解決不可能な矛盾に陥り、そこからはいかなる出口もない。』⁽¹⁸⁾ともあり、実際、このような出席者を観察してみると決まっていつも眉間にしわを寄せて、不機嫌そうな表情で歩き回ることが多く、そして決まって本当に細かいこと穿り、細かい間違いや失敗を指摘してくるものであ

る。このまるで大変な重責を負っているかのような素振りや、『状況を過大評価し、今や彼の人生の幸福と意味の全体が危険に曝されているかのように理解する』⁽¹⁹⁾という虚栄心をもたらしているともアドラーは書いている。

(2) 神に似る

次に、アドラーは、「神に似る」という性格特性を挙げている。これは、『虚栄心のある人の過熱した精神生活においても、力の追及が強化され一種の神の理想に至ること』⁽²⁰⁾である。『人間が所有していない力を持ちたいと思い、特に時間と空間を無視し、例えば、死んだ人と結びつくことを試みることで、時間〔と空間〕を超えたいと思う』⁽²¹⁾ことをいい、式典のなかでは、修祓式において式を執り行う神職や僧侶に多く見ることができる。それは式典の進行に支障が出るほど、“馬鹿丁寧な長時間の修祓を執り行う場合や会場の造りや予算の都合上無理であるにも関わらず、式場の場所や位置、祭壇の造りに自分の信念を貫き通そうとする神職や僧侶の場合がそうである。修祓式は、神職や僧侶がいなければ成り立たないものであり、また他の神職や僧侶にお願いするというのがなかなか難しいので、主催者も我慢するしかないのだが、これは神職や僧侶が神や仏に仕えているという、“神に似る”と思う虚栄心からきているのではないだろうか。これとは別に、式典において忙しいので主催者挨拶より先に挨拶をさせて欲しいという図々しい出席者もいるが、これもそうなのではないだろうか。

(3) 嫉妬

アドラーは、『嫉妬は様々な形で現れる。それは、不信感、こっさりとうかがってはかるとい特徴、軽視されているのではないかと絶えず怖れることに見られる』⁽²²⁾と述べている。実際、挨拶する順番がある人の方が自分より前であるということや式典会場の席次が自分が端や後であるという理由で不満を口に出している人は多い、そしてこういう些細とも思えることでまるで子供のように出席や挨拶を辞退しようとする人も事実いるのである。多くの場合、そういう人は、直接主催者に問いただすなどということはせずに、周りの人間にこっさり話を聞き回ったり、陰で不平不満を口にしている。そのため、式典を開催するときに主催者の担当がいちばん頭を悩めるところがここののである。この嫉妬が、『自分が消耗する嫉妬』⁽²³⁾で、

まだその人間の心の中にある場合は、いいのであるが、それが我慢できなくなり、『向こう見ずで精力的なふるまい』⁽²⁴⁾である外に怒りとなって噴き出してしまうと堪らないものになってしまう。野次を飛ばしたり、笑えない冗談をいってみたり、場合によっては、主催者に食ってかかる場合でさえある。『どの形が現れるかは、共同体生活のためにそれまでどんな準備がされてきたかによる』⁽²⁵⁾とアドラーは書いている。

(4) 妬み

『妬みから自由な人は誰もいないことを認めなければならぬ。』⁽²⁶⁾とアドラーが書いているように式典においては、質素であることやへりくだることを常に頭に入れて計画されることが多い。まず取りかかる案内状の文面がそうであるし、会場の装飾やパーティーの料理、などに関しても華美なものや派手なものを主催者は出来るだけ避けることが多い。

こういう傾向は結婚式や葬儀といった式典も含めてすべての式典にある。これは、『常に人間の同等や対等を再び目指す行動をし、そのための対策を立てることを促すのは、妬みを回避するため』⁽²⁷⁾であるというように、あまり目立たないことが人に妬まれないただ一つの方法であるからである。そして出席者一人ひとりも華美な服装や行動を避け、人から妬まれないように腐心するのである。例を挙げるのなら、来賓の人が会場に入っても、前の方ではなく後ろの方に座ろうとするのも、また式での挨拶の時にステージに上らず、ステージの横で他の出席者と同じ目線で挨拶をする人なども、たまに見かけることがあるがこれにあたるのではないだろうか。

(5) 貧欲 (吝嗇)

貧欲とは、これは、『誰かが他の人を喜ばせる気になれず、したがって、全体や個人のために献身することを惜しみ、わずかな財産を守るために、自分のまわりに壁を高く積み上げることに本質的に表現される広く見られる形』⁽²⁸⁾とあり、式典において、主催者が必要以上に費用を切り詰める場合などがこれにあたるのではないだろうか。

貧相と思えるような会場装飾である場合やとても心から人をもてなしているとは思えない記念品や料理、そして経費を切り詰めようとするあまり自分たちで看板類を制作して、用を足していない場合などもこれにあたると思う。これでは、いくら経費削減とはいえ、

出席する方が可哀そうになってしまうのである。

(6) 憎しみ

『敵意の感情がとりわけよく隠されている現象形態は、不注意によって共同体感覚が課すあらゆる顧慮を行為者が無視することによって引き起こされる人やものの取り扱いと損害である。』⁽²⁹⁾と書かれてあるが、不注意でやってしまった行為は、憎しみという性格から起こるといふ。少し飛躍し過ぎではと思いたくなるが、例えば、会場の人ごみの中で人にぶつかって、その人の持っていたものを壊してしまったり、不注意で司会者が挨拶する人を飛ばしてしまったりすることも、これはわざとやっている事とは言えないが、『個人的な小さな要求を、他者の幸福と不幸よりも重視し、この態度には他者に生じる危険を見逃す人がいる』⁽³⁰⁾ということから起きるのであり、自分が急いでいるから、人にぶつかってしまうのも自分の急ぎの用事を優先するからであり、挨拶する人を飛ばしてしまうのも、意図的ではないにしろ、他の人よりも、その人に注意を向けていないから起こり得ることというのである。もしその不注意で損害を与えてしまった人に、自分が注意を向けていた人と同等の注意を向けていれば損害は生じなかったというその理論は説得力がありそれは、共同体感覚の欠如ということに異論は挟めないのである。

2. 非攻撃的性格特性

(1) 控え目

セレモニーでくす玉やテープカットをやる時など、我々は失敗がないように、それをやる人に迷惑が掛らないように一生懸命注意点を話すようにする。そのような時にだいたい人は熱心に、セレモニーを協力して無事済ませようと熱心に耳を傾けてくれるのだが、なかには、『人を見ず、話に耳を傾けることもなく、話しかけても注意を払わない。』⁽³¹⁾という少しくールで距離を置いたような接し方を取るような人もいる。これをアドラーは、『他者から際立つとか、引き下がることで自分が特別であることを示したいという特別な形』⁽³²⁾であるといい、『このことで人が得られるのは、せいぜい想像力によって存在もしない優位が本物だと思込ませるということだけである。』⁽³³⁾と厳しく指摘しているのである。実際こういう人の場合は、他の人と一緒に説明では、あまり興味を示そうとはせず、一対一で面と向かって説明をして、やっと興味をこち

らの話に向けてくれる場合が多く、特別扱いをしてやっと説明を聞いてくれるのである。

(2)不安

『実際、何かをしようと企てる時に最初に起こる感情が常に不安であるという人がいる。』⁽³⁴⁾とあるが、式典の場合は一発勝負で失敗が絶対に許されないことが多い、そのため式典で何かしらの役を行う人は不安という感情に程度の差があれ、いつも襲われているのが事実である。しかしなかには常軌を逸しているのではと思う人と出会うこともある。ちょっとしたことに、すぐ不安を感じ、時も場所も選ばないで、それこそ必死になって度々、我々スタッフを呼び止めてくるのだ。何度詳しく説明をしても決して晴れた顔をして納得してくれず、その後も不安な表情で訴えてくるのだからどうしようもない。しかしアドラーは、この不安について、『人間の不安は、個人を共同体に結びつける連帯によってのみ取り除かれうる。自分が他者に属していることを意識している人だけが、不安なしに人生を生きるだろう。』⁽³⁵⁾とも書いている。やはりそういう人の場合は、スタッフがそばに寄り添わざるを得なくなっていることが多い。

(3)臆病

『目の前にある課題を特別に困難であると感じ、それを克服するのに必要な力があると信じない人は、臆病という性格特徴を示す。』⁽³⁶⁾と臆病のことを説明しているが、実際、やる前に無理という結論を一生懸命示そうとする人がいる。道路の開通式などの場合、式典が終了したのちに暫くして一般車が新しい道路に進入してくる、そのためにそれまでの本当に短い時間の間に道路上に設置されたアーチ、テントやステージなどをすべて取り除くことになる。当然、主催者もスタッフもなくそこに携わっている人間全員で必死に撤去作業をやることになる。その場合、必ず「とても無理だ」とまず異議を唱える人間が必ずいるのである。『彼〔女〕はその仕事にあらゆる影の面を見出し、それに就くことが実際に不可能だと見えるまでに論理をねじ曲げる。』⁽³⁷⁾である。そして『そこで臆病の表現形式には、ゆっくりとした動きの他に、安全を求める措置、準備などがある。』⁽³⁸⁾とのことばどおり、「出来なくても私は責任を持てませんよ」ということばが続くのである。

こう言うておけば、もし間に合わなくても責任を追

及されることは、ないし、間に合えばその人間の価値が上がるとアドラーは、書いている。『なぜなら、人が勤勉に課題に専念するときは、たとえ成功しても誰もそのことを特別のことだとは思わないからである。そもそも当然のことなのである。(中略)全く準備ができていないのに、それにもかかわらず仕事の課題を解決すれば、(中略)全く違ったものになる。両手が必要なことを片手でなしとげたからである。』⁽³⁹⁾

(4)回り道主義

回り道主義とは『自分の前にある課題を迂回したいと思い、自分で困難を創り出し、それに全く近づかないか、近づくとしてもためらってそうする人の理解に近づく。』⁽⁴⁰⁾とあるが、式典の場合は、たとえ誰の前にある課題であろうが、すぐに全員で力を合わせて解決していかなければならないことが多く、この回り道主義という性格の特徴が表に現れることはあまりない。ただスタッフが当日、煩雑で多忙の業務の中、頭がパニックになってしまい目の前にある本来自分がやるべき業務を忘れて、他人の業務の方を手伝ってしまっていることはある。これは無意識のうちに回り道主義をとってしまっているのだろうか。

(5)適応不足の表現としての制御されない衝動

これは、『われわれが無作法と感ずることで特徴づけられる一定の表現形態をことのほか示す人』⁽⁴¹⁾のことであり、アドラーは本の中で、「爪噛みを止められない人」、「絶え間なく鼻をほじくる人」、「不潔でだらしない人」などを挙げている。こういう人たちは『正しく協力せず、他の人よりも目立とうとしていることをわからせる合図を送っている』⁽⁴²⁾のことであり、共同体から離れる口実を持つとうとしているともこのことを書いている。実際に式典に関して我関せずというスタンスで臨んでいる人は多い、こういう人の場合は何事にも協力的ではない。式典の最中に、物を前の席から配布したり、場所を移動する時になど積極的な協力はまず期待できないのである。それをアドラーは、『無作法の力を借りて、公共の要求から逃れようとするかそれらを邪魔しようとする。』⁽⁴³⁾と書いている。

3. その他の性格の表現形式

(1)快活さ

快活な人は式典を盛り上げてくれる。そのきびきびした動作や明るい表情は、式典において(たとえ葬儀

であっても) 大変に重要な役割となるのである。出席者に快活な人が多ければ、それだけで成功に大きく前進すると言ってもよく、ゆえに運営するスタッフにおいてもこの快活であることが最も大切であり、コンパニオン等が必要となってくるのもこれを強く求められるからである。アドラーは、この特徴を『共同体感覚の印とを感じる』⁽⁴⁴⁾と書いている。

そこには、表情の他にしぐさ、笑いをも含むとあり、それらは、そこにいる人を皆明るくしてくれる作用を持つ。反対にこの快活さを持っていない人の場合は、『他者に喜びをもたらすことには適しておらず、(中略)どんな状況においても、他者の生活を不快なものにする傾向』⁽⁴⁵⁾であるので、残念ながら式典の喜ばしいムードの妨げとなってしまうのだ。

(2) 思考および表現形式

式典における代表者の挨拶を聴いていると、なかにはユーモアに富み、機転が利いて斬新な印象を与えてくれる人もいる。その逆に何処かで聞いたことのあるような格言やいつもそういう場で誰かが語っているような話を持ち出して挨拶をする人もいる。そういう人は、『このような話し方から自由になれず、そのことによって、頭の古さを証明している』⁽⁴⁶⁾とアドラーは書いている。

(3) 未熟さ

『彼〔女〕らは、家の中、生活、社交、仕事の場においていつも生徒のようであり、何かをいえるために合図したい時のように待ち構え、いつも耳をそばだてている。』⁽⁴⁷⁾とある。式典の修祓式やセレモニーの時にしつたかぶりをして、得意顔で、ああだこうだと周りの人にしきりとアドバイスするような人のことではないか。そしてこういう人は、『本質は、生活の一定の形においてだけ確かさを感じ、生徒のスタイルを適用できない状況に入れば、もはや気分がよくないということである。』⁽⁴⁸⁾とあり、例えば、式典における作法などで、その時の状況により通常の場合と違うやり方になってしまった場合などは、不機嫌な表情になってしまうことが多い。

(4) 原理主義者と些事にこだわる人

『どんな状況においても、一つの原理に従って進み、その原理をいつでも正しいと思い、そこから免れることはない。』⁽⁴⁹⁾人のことである。こういう人は、今ま

でどおりの慣れたやり方に固執して変化を避ける傾向がありその原理から外れた意見などに慌てて拒否反応を示す。式典の場合、その運営において実に多くの作法や約束ごと、決まり事が存在する。それは当然尊重しなければならないのだが、場合によっては違うやり方を取らざるを得ない場合も出てくる。ところがそれを臨機応変に対応できないで、もうすでに誰もが知っているような論理を振りかざして、今までどおりのやり方にあくまでも執着する人がいるのである。例えば修祓式を行う場合、通常は祭壇を部屋の北の方角に置くのが決まりであるが、これなども部屋の造りからどうしても、難しい場合もあるのだが、こんな場合にたまたま異議を唱えてくる人がいるのだ。こういう人は、いくら説得してもまず、自分の原理を曲げようとはしてくれないので、それが本番開始の前の場合、アドラーが書いている通りに『しばしば途方もない浪費をもたらし、自分もまわりの人も気まずくさせる。』⁽⁵⁰⁾のである。

(5) 卑屈

卑屈について、『通常、そのような人は身をかがめ、他の人に注意を向けるが、聞いたことを熟考するためではなく、同意し、それを実行するためであるような傾向がある。』⁽⁵¹⁾と書かれている。これが、もし“我々が生活している社会”という共同体のなかであれば、卑屈であることは、共同体感覚が欠如しているということになるだろう、だがこれが、“式典”という共同体である場合は違ってくるのである。式典は出席者全員が、その流れに沿って進行役の指示に黙って従って行動をしなくては成り立たないものであり、当然そこに考えるような時間はないからである。黙って同意し、漠然と実行していくことが大切なのである。よってここでいう卑屈であることが式典では、大切な共同体感覚であり、卑屈でないことは、共同体感覚が欠如していることなのである。

(6) 横柄

横柄である人が、一人いると、周りの人間はイライラしてくるし、そしてそこにいるいろいろなスタッフは焦り出す。なぜならこういう人は、『常に一番の役割を演じたいと思いたい人である。そのような人にとって人生は「どうすれば私はすべての人よりも優ることができるか」という永遠の問いでしかない。』⁽⁵²⁾からである。何事においても自分が中心でなければ納得し

てくれないので、周りの人間は気を使わざるを得なくなる。そしてこういう人は、『しばしば、他の人が命令すれば仕事ができなくなったり、命令されたことを実行しなければならない時に興奮状態になる人がいる。』⁽⁵³⁾ので、独りよがりですべての式典での挨拶は長くなることが多く、そして例えばくす玉の紐を引く役などをお願いした場合、(役をお願いしないと腹を立てるのである。皆に合わせることをせずに勝手に何を始めるか分からないため、目を離せなくなる。周りの人間は本当に疲れてしまうことが多い。

(7) 気分屋

気分屋と言われている人は、『絶えず陽気な気分で、それゆえ見せびらかしたり強調して、人生から明るい面を手に入れようと、喜びと陽気さの中に人生の必要な基礎を創り出す努力をする人がいる。』⁽⁵⁴⁾というように、式典の始まる前などでは、雰囲気明るくしてくれて場を盛り上げてくれる場合が多い。そしてこういった人は式典の所役なども断わることや物怖じせず積極的にやってくれることが多い。ただ、『あまりに人生を陽気に理解しすぎ、真剣に受け止めなければならない状況も陽気に扱い、これに伴って、子供っぽい性格を現す人もいる。この性質は人生の真剣さからかけ離れているので、そこからよい印象を受けない。いつも不確かな感じを受ける。』⁽⁵⁵⁾のである。したがって、こういうところで誤解されてしまい、『この認識に従って困難な課題からは、遠ざけられることになる。』⁽⁵⁶⁾のである。したがって、式典の所役をやることに積極的であるにも関わらず、その役が回ることは意外と少ないのである。

(8) 不運な人

不運な人は、『いつもどんな不運にあうか、どんなこともまったくうまくいかず、自分が着手したすべて失敗に終わるということを確認するために、全人生を過ごす。』⁽⁵⁷⁾とある。すべてとまではいかないが、なかには、あの時は挨拶で失敗し、そして別のある時は、テープカットで鉄を入れようとして失敗したという具合に自分の今までの式典における失敗を自慢するかのようには話す人もいる。冗談とも謙遜とも違って、悲観的な顔つきで自虐的な言い方で訴えてくるのである。そこには、「だから十分俺に気をつけてくれよ」、「俺には、いろいろ配慮してくれよ」という訴えがあるのが分かる。これをアドラーは、強い虚栄心の現れである

という。『このような誇張が出来るのは、自分を何らかの仕方ですべての出来事を中心であると見なす人だけである。』⁽⁵⁸⁾ともいい、一種の尊大であるという。

(9) 宗教心

この宗教心という共同体感覚の欠如が式典で見ることができたことは、まだない。アドラーが本を書いた20世紀の初めのヨーロッパと現代の日本では時代も宗教感も全く違う。例えば神に祈る場合でも式典においては、共同体全体に神の御加護があることを祈るのであり、自分個人のことを祈ることはまずないのである。

4. 情動

(1) 人と人を分離させる情動(怒り、悲しみ、誤用、嫌悪、不安〔恐怖〕)

人と人を分離させる情動は、『それはまた人間の状況を自分の都合のよいものにするために変化をもたらすという目的を持っている。』⁽⁵⁹⁾という。式典の場合、おもにスタッフの上下の関係の中で起きることが多い。『優越性の目標を達成することに自信がなく、安心できない人が、(中略)情動の力を借りることで、この目的に近づこうとするのを見る。』⁽⁶⁰⁾と書いてあるように、簡単に自分の都合である、その目標は達せられるのである。ただこの情動は、『その作用を身体にも表す。情動の身体に伴う現象は、血管や呼吸器官への作用である。(脈拍の上昇、紅潮や蒼白、呼吸活動の変化)。』⁽⁶¹⁾があり、その人間をよく観察すれば分かるので事前にある程度の対処ができるのである。

(2) 人と人とを結びつける情動(喜び、同情、羞恥心)

この情動は通常、お互いの共同体感覚を高めるのに作用することが多く、式典においても良い結果の方に作用してくれることが通常は見受けられる。だがこれらが誤用である場合、喜びが、『他者に対する優越感を求める場合』⁽⁶²⁾である人の失敗を笑う時や、失敗に対する同情がただ『安直に公の名誉を守るため』⁽⁶³⁾から起きている場合、そして羞恥心で赤くなるのが、『その式典の輪から『退くための手段』⁽⁶⁴⁾である場合は、逆に共同体感覚を否定し傷つけるものになるのとアドラーは書いているのである。

・ 考察

最初に書いた「国母事件」にしても、「卒業式にお

ける国歌斉唱、国旗掲揚を一部の教師や生徒が拒否する事件」も「成人式での新成人が酔っ払ってトラブルを起こす事件」にしても、そこには自分の考えや気持ちを優先する行為があり、他人に迷惑をかけないという思いやりが欠けてしまっていることから起きている。そこには、共同体感覚の欠如である「虚栄心」、「原理主義と些事にこだわる人」、「情動の怒り」が現れていると言っている。(図4)は、ブログに載っていた共同体感覚を図で表したものである。

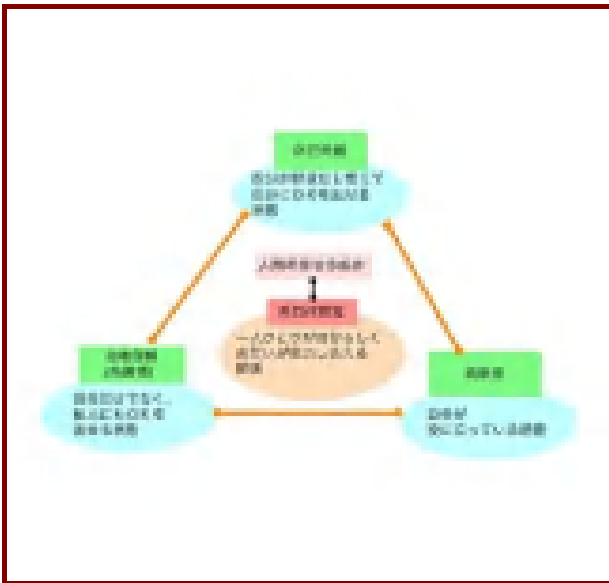


図3 共同体感覚を構成するもの

ブログ「あべたが流」学び合い日記」2009年12月5日
<http://manabiai.g.hatenane.jp/>より

この図の通りに共同体感覚は、自己受容と他者信頼(所属感)そして貢献感の3つから成り立っていると言っているだろう。自己受容とは虚栄心などで飾られない、いいことでも悪いことでも自分のありのままの姿を受け入れることであり、今まで書いてきたとおりに一度きりで失敗が許されない式典においてもひとり一人に求められる姿勢ではないだろうか。

そして他者信頼(所属感)とは、自分がその社会の一員であり構成員のひとりであると自覚することであるが式典においても自分がその一員であるという自覚を持って自我を通さずに我慢するところは我慢していかなければ成功はおぼつかないのである。

そして最後に貢献感とは社会に有用でありたい気持ちであると解釈すれば、式典においても全員の協力があって初めて成功に近づくのである。やはり式典においては、ひとり一人の共同体感覚というものが重要になってくるのだ。

・今後の課題

今まで見てきたとおりに、式典においては共同体感覚というものが重要な部分を占めてくる。それが故に「村社会」"和を尊重する"日本では、生活の区切りにおいて数々の式典が行われてきているのである。だが日本ほど多くないとはいえ他の国々においても式典は行われるのだ。それがたとえ社会主義の国であれ、多民族国家でも、遊牧民族の国々でも行われる。それでは、その根本にある文化とか思想は何なのであろうか、そして日本の式典とは、どのあたりが違うのだろうか今後研究していきたい。

注

(1)サイト「藤堂安人の材料で勝つ」

<http://techon.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20070820/137916/?ref=BPN>

(2)本郷 ひろなか「勇気づけのページ」

<http://yukiduke.jp/index.htm>, アドラー心理学

(3)ドイツ語の共同体感覚(Gemeinschaftsgefühl)という言葉は、英語に翻訳するのはやや困難です。(社会感情(social feeling) 共同体的意図(communal intention) 共同体関心(community) 社会的関心(social interest)。この最後の「社会的関心」が、最もよく用いられています。(「アドラー心理学入門」1989年ロバート・W・ランディン著、1998年前田憲一訳 67頁)

(4)<http://www.geocities.jp/tillich37/> ペンテコステ宣教学「日本伝道攻略法」

(5)http://japan.cnet.com/blog/mugendai/2007/12/08/entry_25002766/ 「CNET TAPAN 夢幻 大のドリーミングメディア ケータイホームレス・さまよえる日本人論」

(6)「国立第二小学校事件」2000年3月24日、東京都国立第二小学校の屋上に戦後初めて、日の丸が掲げられた。

国立市には、市立小学校が8と市立中学校が3あるが、戦後二小を含め、他の全ての学校で卒業式と入学式における国旗掲揚と国歌斉唱が適正に行われていなかった。

しかし2000年、国立第二小学校の沢幡校長は文部省の学習指導要領に従い、国旗掲揚と国歌斉唱を取り入れた卒業式を行おうと、昨年12月から8回の職員会議を開き、教職員への理解を求めたが、議論は平行線をたどった。

その為、校長は式場内での国旗掲揚と国歌斉唱を止

め、屋上へのみの国旗掲揚で、教職員との和解をはかったが、話し合いは卒業式前日まで続けられた。式前日には9時間にも及ぶ職員会議を開いたが、双方合意できず、校長はやむなく、式当日に屋上へ国旗を掲揚した。式が終了し、卒業生を見送った後、5,6年生の児童30人と10数人の教職員、保護者が校長に詰め寄り、国旗を降ろさせ、土下座を迫った。詰め寄った時、児童等は前日行われた職員会議の内容を克明に知っていた。教職員が児童に内容を漏らし、煽動したのである。

<http://www.geocities.co.jp/NeverLand/5533/kunitati-index.htm> リンク先=Yahoo!(記事削除)

(7)11 日にあった静岡県伊東市の成人式で、酒を飲んだ新成人の男性がトラブルを起こした。

冒頭、鈴木藤一郎市長が式辞を述べ始めると、「ハゲ」「景気をよくしろ」などのヤジが飛び、市長が「うるさい」と怒鳴って注意した。式が終わると6、7人が一度に壇上に上がり、市民憲章が書かれた垂れ幕を乱暴に引っ張って破った。(毎日新聞)

壇上で罵声、市民憲章を破く酒に酔った新成人 - 静岡県伊東市市長のあいさつ中、酒に酔った新成人の男性が壇上に上がり、市長に罵声を浴びせた。

男性は市職員に取り押さえられた。また、式終了時には男性2人が壇上に上がり、花瓶を持ち上げたり、壁に掲げられた市民憲章の書かれた紙(長さ約4m)を破ったりした。

(時事通信/一部)

<http://www.geocities.jp/itodqnrog/itodqnstories.html>

リンク先=Yahoo!(記事削除)

(8)<http://nippon7777.exblog.jp/1791900/> ブログ『桜魂』

(9)出典: フリー百科事典『ウィキペディア Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%BC%8F> 卒業式 』

(10)出典:フリー百科事典『ウィキペディア Wikipedia

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BC%8F%E5%85%B8> 儀式 』

(11)アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) 1870 - 1937 年。オーストリアの精神科医。1902 年からフロイトのウィーン精神分析協会の中核的メンバーとして活躍したが、1911 年に学説上の対立から脱退した。フロイトと訣別後、自らの理論を個人心理学

(Individualpsychologie, individual psychology) と呼び、全体論、目的論などを特色とする独自の理論を構築した。ナチズムの台頭に伴い、活動の拠点をアメリカに移し、

精力的な講演、執筆活動を行ったが、講演旅行の途次、アヴァディーンで客死した。

(12)~(64)「アドラー・セレクション性格の心理学」アルフレッド・アドラー1926年著、岸見一郎訳 14頁~141頁

参考文献

・Robert W. Lundin “ALFRED ADLER'S BASIC CONCEPTS AND IMPLICATIONS”

Copyright(C)1989 by Accelerated Development Inc. All rights reserved.

Japanese Translation rights arranged with Taylor & Francis and Mark Paterson Associates The Asano Agency, Inc. in Tokyo

・Alfred Adler “Menschenkenntnis” Fischer Taschenbuch Verlag, 1973 (Original: 1926)